

〔目的〕

四方を海に囲まれ、耕地面積も少ない対島の生活の中で美と夢を求めた女性の衣生活を僅かに残る衣服から考える。

〔調査項目〕

1. 麻について。麻畑は持ち畑のうちで最上の畑が壁ぼれ畑といわれる。麻の名残りととどめる地名もある。麻の地厚さと硬さに耐えながら野良仕事に「そしんだ逞しい対島女性の衣生活に深い感動をおぼえる。
2. 労働着「ドンザ」について。労働着は一般に木綿を用いるが、嫁入りの際に持参した衣裳の1つに木綿に絹を織り混じった「ドンザ」がある。女性の夢と憧れが認められている。
3. ハギトウジンについて。「美女伝」にまつわる対島南端の豆酸に伝わる野良着は、生活の習俗と工夫がまみおしたパッケージワークの美といえる。

〔まとめ〕

1. 現存する麻織物に、かつての対島の生活を支えた女性の逞まじさが感じられる。
2. 労働の際に着用する「ドンザ」にも絹糸の女性の夢と憧れがみられる。
3. 20世紀現在の流行の1つであるパッケージワークが、明治初期すでに対島南端に労働着として美しく奪われた。自給自足の生活であった頃、絹の美に魅せられて純日本的な美を創り出した豆酸の人々の高度な感覚を高く評価したい。また小さな布も粗末にしない生活を知り、使い捨ての生活について深く反省する。